

4. 戦国時代の遺構

(1)大溝と大堀 北内堀の下方から、先行する2条の東西溝を検出しました。南側の^{おおみぞ}大溝(溝1)は幅約5m、底面の標高は3.1m前後で、約15m間隔で直交方向に高さ0.5m、幅0.3m程度の掘り残しが認められ、掘削時の作業区界とみられます。

大溝の北側を、幅0.5mの畝状に残して掘り広げ、全体として底幅約9mの^{おおほり}大堀(溝2)を仕立てていました。拡張部は幅4m弱×長さ3~7m、深さ0.1~0.7mの方形土坑^{とこう}が不揃いに連なり、土坑間は平坦面となっています。調査区の東寄りでは、意図的に掘り残したと考えられる幅約5mの突出部が認められました。

大堀は突出部を残してブロック土で一気に埋め立てられていました。おそらくここには大溝段階で中核部の郭^{くわ}と郭をつなぐ橋が架かっていたとみられ、拡張に際して橋を存続させるために掘り残した可能性があります。

(2)築城用土橋 大堀の突出部とその延長上の大溝埋土上面では、外辺に沿わせて川原石を長手に据え、あるいは杭と横木で押さえて、^{たわらのう}俵土囊の小口を揃えて積み上げ、間に土を敷いて幅3.5mの通路としていました(築城用土橋1)。また、西寄りでも幅広の平坦面に1と同様に俵土囊を用いた通路を発見しました(築城用土橋2)。2か所とも、元和修築の内堀造成時にはブロック土で埋め尽くされた堀底から0.3m程度突出していたこと、2か所の間にちょうど不明門がおさまることから、不明門の石材や木材などの資材搬入用の仮設通路と考えられます。



内堀の下方で検出した戦国時代の堀跡と内堀底に仮設された築城用土橋(東からみる)

5. まとめ

今回の調査で検出した高槻城跡の主要な遺構について取りまとめます。戦国時代については、大溝(溝1)・大堀(溝2)があります。大溝を拡張した大堀は、ブロック土で一様に埋め立てられており、この状況は、これまでの三の丸北東部の調査実績などから、高山右近城主期以後の遺構と考えられます。

したがって先行する大溝は和田惟政城主期以前の所産とみられ、大堀突出部が示唆する郭同士をつなぐ橋の存在は、戦国時代の高槻城の中核部の縄張りについて重要な知見をもたらしたといえます。ちなみにブロック土の直上の土層から^{じゅらくだい}聚楽第の軒平瓦と同じ文様の^{かけひらがわら}掛平瓦が出土しており、かつて本丸跡から出土した金箔瓦と同様に、豊臣期に搬入されたと考えられます。

近世の遺構としては、二の丸北内堀、不明門基礎地業、木橋、仮設土橋があります。とりわけ不明門に連絡する木橋はまったくの新発見であり、高槻城の被災履歴との照合等を通して、城郭施設の変遷を捉え直す重要な知見となります。また隅櫓台の構築部位については、二の丸造成面(地上)にあったとみられます。絵図間の異同が発掘調査によって決着した一例であり、今後も調査を蓄積し高槻城の実態に迫っていきます。



大堀の埋土直上で出土した豊臣期の掛平瓦

高槻城二の丸跡北辺部の調査 現地説明会資料

○調査主体	高槻市教育委員会	○現地説明会	平成29年6月3日
○調査期間	平成28年11月1日~(調査継続中)	○調査面積	約2,600㎡
○調査目的	雨水貯留施設建設に先立つ発掘調査		

1. 高槻城跡

高槻城は天神山丘陵南側の沖積地に位置する平城で、北に西国街道、南に淀川を擁する水陸交通の要衝に位置します。戦国時代の高槻城は、織田信長上洛後は和田惟政及びキリシタン大名の高山右近などが城主をつとめ、堀と土塁で囲まれた堅固な城でした。大坂夏の陣後の元和三年(1617)に徳川幕府が修築した近世の高槻城は、石垣と土居で構築され、天守がそびえる本丸をはじめ、二の丸、三の丸、^{おびぐるわ}帯郭、^{べんざいてんぐるわ}弁才天郭、蔵屋敷などを備えた本格的な近世城郭です。複数の城絵図と現在の町割りなどから、全体の規模は東西630m×南北580mと推定されています。

高槻城は明治七年(1875)の鉄道建設に伴って破却され、その後も堀跡の耕地化や工兵隊駐屯などに伴う大規模な改変があり、城址は大きく変貌しました。

2. 雨水貯留施設建設に先立つ発掘調査

今回、二の丸と三の丸(北郭)との間に設置される雨水貯留施設の建設に先立つ発掘調査を実施しました。

調査の結果、元和修築にかかる二の丸の北内堀及び不明門の基礎部分を検出し、築城用資材を搬入する^{すみやぐら}仮設の土橋を2か所で確認しました。また不明門と三の丸を結ぶ木橋の橋脚を確認したほか、二の丸西北部の隅櫓台^{すみやぐら}については、城絵図に記載がある一方で、^{やぐらだい}櫓台の石垣が検出されないなど、近世高槻城の構造や縄張りの変遷を考える上で、^{なわぼ}の新知見が得られました。さらには内堀の下層から戦国時代末期の大溝や大堀を検出しました。城郭以前の遺構として鎌倉・室町時代の水田や集落遺構、廃城後の破却に伴う仮設構造物を確認するなど、遺跡の実態や消長に迫る重要な手がかりを得ました。

3. 江戸時代の遺構

(1)二の丸北内堀 東西方向の内堀は長さ75mにわたって検出しました。現存幅約18m、現存深約2.5m、底面幅約12mを測り、両岸の斜面は30~35度の角度で立ち上がっています。堀底から1.6~1.8mの高さで、斜面に横木を並べ杭で固定した護岸施設が確認されました



南側上空からみた今回調査地と、近世高槻城二の丸周辺の縄張り(推定)



『高槻城絵図』17世紀後半 仏日寺蔵



『町間入高槻絵図』18世紀 仏日寺蔵

調査地全景(2017年3月30日撮影)

また、内堀の直下からブロック土によって埋められた戦国時代末の溝2条(「畝堀」・「大堀」)が検出され、内堀の走向がそれらの溝を踏襲して掘削されたことが判明しました。

(2)不明門 二の丸北縁で内堀に面して設けられた門です。調査地東寄りでは門の石垣構築のための掘形と根固め石を検出(右下写真)するとともに、明治七年の城地破却・石垣石搬出に伴う大量の裏込石の流出を確認しました。石垣の平面規模は基礎部分で東西約15mと推定され、土塁部の斜面立ち上がりから約0.5m、内堀へ突き出ていました。なお門自体の遺構は工事範囲外にあり、今回は基礎部分の保存を図っています。

(3)二の丸隅櫓 高槻城二の丸の北西隅に、二層(『高槻城絵図』)ないし東・南に付櫓をもつ単層の隅櫓(『町間入高槻絵図』)の様子が描かれています。今回、調査地西端で隅櫓の確認を目指しましたが、土台石垣の掘形は全く検出されませんでした。おそらく櫓台は二の丸造成面に直接設置されていて、廃城時に隅櫓もろとも取り壊されたと考えられます。調査所見から『町間入高槻絵図』の表現がより実態に即していることが判明しました。

(4)木橋 三の丸側から不明門へ通じる木橋の橋脚を2組検出しました。橋脚1は一辺約30cmの粗く面をつけた角材を用い、梁間約4.0m×桁行約4.0m。橋脚2は、北端の1対を除いて径約15cmの丸太を複数用い、梁間約2.8m×桁行4~4.5m。橋脚1はわずかに内傾させて深く、橋脚2は強く内傾させてやや浅く打ち込まれていました。いずれも上端は水面高とほぼ同じ高さで様に切断されています。また、三の丸側の橋のたもとでは石垣を検出しました。丸太を杭で固定し、チャートの石材を丸太の直上に揃えて3、4段長手に積み上げたもので、橋の破却時に最下段を残して栗石もろとも堀側へ崩されていました。

この木橋は、長さ15m×幅4mほどに復元できます。材の仕様や設置状況から、橋脚1と2が一つの橋を支えていたとは考えにくく、二の丸東門(正門)の橋脚材と同規模の橋脚1が先行し、橋脚2は架け替えの可能性が高いと判断されます。本資料掲載の絵図類(右上)には見られませんが、時期不明ながら、東門と橋を欠く一方で架橋された不明門が『日本古城絵図』や『諸国城之図』に描かれていて、今後の検討課題になります。

三の丸から二の丸不明門へ通じる木橋の橋脚を二の丸側からみる
外側の橋脚1は3対6本、内側の橋脚2は4対15本の計21本を検出した。



(5)三の丸 北内堀の北側は三の丸北郭の南端にあたります。絵図では、内堀と牛頭天王社(現、野見神社)との間は広場や松並木が描かれています。明治の破却後に、大きく改変をうけたため、江戸時代の生活面は残っていませんでした。



不明門正面の石垣基礎部分を堀側からみる
高槻城の石垣は、堀底を箱形に掘り下げて底に胴木を据え、その上に花崗岩の石材で石垣を築くとともに、その外側を根固め石でおさえている。軟弱な地盤ならではの工夫である。この不明門の基礎は、旧大堀内に位置する。内堀南岸のブロック埋土をとくに分厚く盛り、また根固め石の外側に杭を密に打ち込んで、堀側への石垣全体のせり出しを防いでいる。